

脳という「ワンダーランド」と小説

―村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』についての考察―

太 田 鈴 子

1 村上春樹の「ワンダーランド」

村上春樹作品の多くは、ミステリアスなおもしろさに満ちている。それは、「ワンダーランド」に遊ぶおもしろさである。今、「ワンダーランド」と言えば、「デイズニールランド」に代表されるテーマパークをイメージするであろう。「デイズニールランド」は、現実には消費空間でありながら、考え抜かれた経営方針と運営方法によって、入場者を、お伽の国・冒険の国・開拓の国・未来の国という非現実空間に誘い込む。「デイズニールランド」は、入り口を一步入ると、視覚的に、聴覚的に、そして人間をはじめとする対象との関係において、あらゆるものが現実を隠蔽するように作られている。このように「ワンダーランド」は、過去の記憶と知覚によって意識したものが醸し出す感動を主眼としている。その感動は、享楽につながるものであるが、自分に向けられる好意的まなざしによって、むなしさは一切なく、満足感となつて残る。満足感は新たな感動を与え、「ワンダーランド」に魔法にかかったように魅了される。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(85・6)も所々に仕

掛けられた話題や描写が、ミステリアスな感動と満足感を誘発する。「ハードボイルド・ワンダーランド」と「世界の終り」がそれぞれの世界を持ち、交互に語られる構成も、むろん仕掛けの一つである。奇数章「ハードボイルド・ワンダーランド」の世界は、作中の現在を語り、偶数章「世界の終り」は、「ハードボイルド・ワンダーランド」の世界を生きる、主人公の意識の核を、博士がビジュアル化した物語世界という設定になっている。この設定と、現代的なビルのエレベーターが巨大なステンレスの箱であるとか、エレベーターを降りて部屋に案内されたと思うと、クロゼットの扉一枚向こうには、水が流れ、滝が落ちる空間があるとか、音抜きという魔術を施す博士の研究とか、次々紹介される道具立ては、現実世界とは思えない不思議にあふれ、それと遊ぶおもしろさを読者に与える。

さらに、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』において何よりワクワクを喚起する道具立ては、心すなわち感情、意識の世界がイメージ化されることであろう。表題にある「ワンダーランド」とは、心の比喻でもある。「ワンダーランド」とは、「アリスの不思議の国」がモデルだと博士は言う。「不思議の国」を「ワンダーランド」とふりがなによって読ませ、「そこにもぐりこむためにはとくべつの薬が必要なわけですな」(下

p.80)と言っている。アリスの「とくべつな薬」とは、小さな穴へ入ることができるよう、人間を小さくするために必要なものだが、博士もまた、主人公の意識の核に入り込む【薬】ならぬ【シャフリング】という方法を案出したというわけである。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の前に村上春樹が発表した『羊をめぐる冒険』(83・10)では、星の印がついた羊が人の脳内に入る、後の作品『ダンス・ダンス・ダンス』(88・10)では、空き部屋で六体の骸骨と対面するとか、殺人を感じ取るとか、壁の中に消えていくとか、『スプートニクの恋人』(99・4)では、観覧車からもう一人の自分が殺人を犯しているところを眺めるなど、知覚と脳神経との相関をイメージするような場面が書き込まれていく。SF小説、ホラー小説、怪奇小説といったエンターテインメント作品は、読者を異界や幻想世界に誘う非現実的世界を設定するが、村上春樹の作品では、人が知覚し、意識したもののすべてを現実と捉える。たとえ現在の科学が証明できない事であっても、意識の現実と捉えていると思われる。

2 神経科学、脳科学における意識

二十世紀末あたりから脳科学者による、一般向けの脳や意識に関する読み物の刊行が目立ってきた。たとえば、目についたものだけでも、アントニオ・R・ダマシオ氏の『無意識の脳 自己意識の脳』(田中三彦訳03・6・

12 講談社 原書 *The Feeling of What Happens—Body and Emotion in the*

Making of Consciousness, Harcourt Brace & Company, 1999)『感じる脳』(田

中三彦訳05・11・10 ダイアモンド社 原書 *Looking for Spinoza—Joy, Sor-*

row, and the Feeling Brain, Harcourt Inc. 2003) 茂木健一郎氏の『意識とはなにか—〈私〉を生成する脳』(03・10・10 ちくま新書)、『脳と仮想』(04・9・25 新潮社)などがある。

ダマシオは、認知神経科学の研究者であり、現在、南カリフォルニア大学の脳と創造性の研究所教授であるが、ダマシオ自身が診療を行った神経疾患患者の症例を考察に取り入れ、脳の特定部位の損傷によって特定脳部位の回路が喪失すると、それにもなつて特定の心的事象の喪失がもたらされるなど、脳の各部位の機能を明らかにしてきた。またある特定の情動を表出させる能力を喪失すると、その情動に対応する特定の感情を経験する能力も喪失するが、ただし、その逆は真実ではなかったという。この情動と感情は、ダマシオの脳に対する考え方を理解する重要なキーワードである。

恐怖に対峙した時心臓の鼓動が早くなるなどの身体的な変化が起きる、これが情動である。そして、今身体がどういう状態にあるかが脳に報告され、対応する「身体マップ」が形成されていく。その身体マップをもとに人は怖いという感情を認識するというのがダマシオの考え方である。怖いと感じるから心臓がドキドキするのではなく、怖いものに対して身体的変化が起きるから、そのあとに怖さを感じるというのである。身体が意識による判断より速く反応することで、生命は危険から守られているという考え方であつて、これにより情動も感情も、どちらも深く生存に関わっているものと考えられている。

茂木健一郎は、脳科学者で、現在ソニーコンピュータサイエンス研究所のシニアリサーチャーである。茂木は、意識されるものは、それぞれユニークな質感(クオリア=感覚質)に満ちている、ある状態が他の状態と異

なるユニークな〈あるもの〉として把握されるのは、それぞれの状態がそれぞれクオリアを通して感じ取るからだということを重視している。近代科学が主張してきた、さまざまな物質からなる現実世界こそがこの世で唯一確実な存在であるという世界観に対し、「私たちの意識」は、脳を物質として見ただけでは把握することができない。「人間が体験することは、全て、脳の中の一十億のニューロン活動によって引き起こされる、『脳内現象』だ」(『脳と仮想』p.27)と考え、

私たちの主観的体験を生み出す脳内のニューロンの活動は、「今、ここ」という限定の下で起こる。一方、私たちの心は、「今、ここ」の限定を超えることができる。遠い星のことを思ったり、恐竜時代の昼下がりのけだるさを思い浮かべたり、平安時代の女官の生活感情を想像したりすることができる。それどころか、この現実生活には存在しない、一角獣、正五面体、透明人間といったものを思い浮かべることさえできる。そんなことを改めて指摘することが不自然に思えるほど、私たちの心的表象は、「今、ここ」という時間的、空間的限定を超えて、無限の仮想空間の中に遊ぶことができる。(『脳と仮想』p.30)

と、脳の持つ無限の空間をイメージする。仮想が、人間が生き抜くために必要なのは、現実から束縛され、たとえ精神病院の閉鎖病棟に入れられたり、監禁されていなくとも、現実から逃れたいと思う時で、自由に羽ばたくことができる。現実には不可能と知っていても、自由を仮想の中で満喫し奇跡を夢想することで自分を慰める。それは、脳の中の神経細胞という現実を支えられているからだ。意識は、「数に直すことのできない、様々なクオリア」、「様々なものを仮想」し、意識の表象されること全てを把握

している「私」を存在させる。「私」が「今、ここ」に存在していることだけは、疑いようがない。

クオリアに関心を持った茂木は、『源氏物語』の帝、漱石『それから』の代助、一葉『たけくらべ』の美登利に心を動かされる時、心の中にそれぞれの人物が立ち現れる。心の中に浮かぶ仮想には、限界がないと断言する。

子供のおとぎ話から、『源氏物語』まで。脳という物質の塊から放射される仮想の世界が、これほどの広がりを持つということは真に驚くべきことである。私たちはその可能性に賭けてみるしかないのではないか。

現代は、知の王権空位の時代である。社会の部分問題を扱った、ちよっと気の利いた言説はあっても、主観的体験の起源から、宇宙の物理的成り立ちまでを含めて、世界の在り方全体を引き受ける志はやせ衰えつつある。近代において知の王座についていた科学は、「今、ここ」の因果性に局限化した説明原理は提供するが、私たちの意識の起源も、仮想の世界の存在基盤も説明し得ず、単なるテクノロジーの知と化している。デカルト以来の近代主義は方法論的困難に陥り、今終わりを迎えつつあるのである。(『脳と仮想』pp.221-222)

近代において何よりも主流となっている科学は、方程式によって物質の生成や変化を求めることには成功したが、人間の脳内の意識を明らかにすることはできないのではないかと、科学への疑いを明らかにする。

一個一個の神経細胞を切り出して、培養皿の上においても、そこには

私の「魂」はない。「魂」は、どうやら、脳の中の一千億の神経細胞の関係性から生じる。しかし、なぜそんなことが可能なのか、近代科学の最高最良の成果を持ち寄っても、さっぱり見当がつかない。(略)近代科学のやり方には、どこか根本的な欠陥がある。(略)仮想だからといって、そこにリアリティや、切実さがないというわけではない。現実だからといって、確実だというわけではない。(略)自分の心の中にあらわれる他者の魂たちをどれくらい切実な存在として自分の中に立ち上げるかということは、ひとえにその人の意識的、無意識的選択にかかっている。(『脳と幻想』 pp.209-213)

近代科学を信じることによって、科学的に証明できるものだけを信じるようになったが、実は、本当にそれらは確実なものなのか。私たちの意識は、失望や予想外の出来事や苦悩に直面した時、美しいものや幸福の時を夢見る。何事もない時でも、心地よい音楽に感動するのは、現実の苦しさを知っているからである。また自分の意識の中に現れる他者の気持ちや、どのくらい切実に自分の中で意識するかも、その人の意識的、無意識的選択にかかってくる。こうした考え方に従えば、目には映っていない意識しなければ見えない。逆に、目に映っていない意識が見えていると判断することもあるということであろう。

3 春樹の意識に対する考え方

村上春樹は『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』に、「大脳生理学の分野では最も有能にして最も意欲的な科学者」(『世界の…』以下略記)

下 p.77)と自負する大脳生理学の権威である老博士を登場させた。彼は、資料を盗まれたことを理由に、一人の男の意識を破壊し、無意識の状態に追い込む。博士の研究の目的は、自分の興味から編み出した理論を実践に移したいという自己欲求の満足にあるだけである。結果は失敗でも成功でもよく、その結果に納得するだけである。社会に役立つ事につながる実験ではなく、誰に対してもその結果を公表せず、結果に対して責任も持たないのである。科学的知識を使った一人遊びにすぎない。

この作品は、茂木が、近代科学が「私たちの意識の起源も、仮想の世界の存在基盤も説明し得ず、単なるテクノロジの知と化している。」と書く約二十年前、一九八五年六月一日に、新潮社から刊行されている。すでに村上春樹は、科学者の研究の在り方に疑問をなげかけていた。実験さえできれば何でもするという老人を使って、自社に有利なシステムを手に入れようとする「組織(システム)」という名の企業を背景に据え「テクノロジの知と化している」科学技術を利用するのは、利益のみを追求する大企業だと指摘している。茂木は、科学研究と企業との関係には触れていない。利潤追求のためには、人間を実験台に使うことをも厭わない企業の闇にまで言及したのは、村上春樹が近代の欠陥について気づいていたからであろう。

では、この作品において、脳、意識は、どのように理解されているだろうか。

十九世紀から二十世紀にかけて意識という注目されてきたフロイトやユングに対して、「あくまでそれについて語ることができるだけの術語を発明したにすぎん」(『世界の…』下 p.81)と、博士に言わせ、精神分析が、結局意識というものを明らかにしていないと批評している。

博士に語らせた脳のしくみとは、まず「一人ひとりの人間の過去の体験の記憶の集積によってもたらされた思考システム」(『世界の…』下 p.79)が深層心理であり、アイデンティティーであり、心である。人それぞれ心を持つが、同じ心は絶対に存在しない。そして、人は自分の心すなわち思考システムの十五分の一から二十分の一しか把握していない。思考システムは、その状況や対象によって瞬時にどれかのポイントを選択しているが、そのプログラムについて本人は何も知らない。知らなくても機能しているので問題ないが、見えない、知らないということで、ブラックボックスと名付けている。科学でも説明できていないことから「人類最後の未知の大地」(『世界の…』下 p.80)としている。

思考システムでは、「無数の記憶や認識の断片^{フラグメント}が選りわけられ、選りわけられた断片が複雑に組みあわされて線^{ライン}を作り、その線がまた複雑に組みあわされて束^{バンドル}を作り、そのバンドルがシステムを作り」(『世界の…』下 p.80)といったように生産をしているという。その行程を知ることができないが、そこから発せられる指令によって、その人の行動が決まる。しかし、その人の、その時の気分というものがその指令に待ったをかける。また思考システムである深層心理は、常に人の体験に応じて変化しているために、常に指令が変わることとなる。人は生きている限り体験をし、それを蓄積していく。そのことについて「世界の終り」の方では影が、「たとえ記憶が失われたとしても、心はあるがままの方向に進んでいくものなんだ。心というものはそれ自体が行動原理を持っている。それがすなわち自己さ。」(下 p.67)と説明し、心は、自ら有機体に影響を与えていると、博士と同じ認識を語っている。

ブラックボックス、すなわち心についてダマシオは、その構造について

は見解が異なるが、感情が感情に影響を与えるという輻輳した心の展開と、人の意識が関与しないものであることは共通した認識を示している。その違いは、村上春樹が、ブラックボックスから指令が発せられて行動に影響を与えると考えののに対し、ダマシオは、知覚が把握し身体が反応する情動が心に影響して感情が起こり、さらにそれを認識する意識が発生するという見解にある。

また、茂木は、ダマシオと同様に、対象に対する身体の反応が心に伝わり感情と意識が起こるという見解であるが、さらにクオリアが存在することを重要なこととして強調している。

「世界の終り」では、心は悩みや苦しみを感じさせるもので、それと表裏の関係として、人を愛する気持ちや音楽を楽しむ気持ちを伴っていると解釈されている。心がなければ、静けさと安らぎの中で生きられるという。これは心の中にある、苦悩を感じる部分だけを取り出すという発想である。この解釈からイメージされる心は、一つの固まりである。影がそれを全て背負えるようなものである。

ダマシオによれば、悲しみや苦悩を感じさせて涙が出るほど泣かせる部位は、中脳として知られる脳幹にあることが、パーキンソン病患者の治療のために、脳幹に小さな電極を植え込み、電流を流した時に、電極がわずか2ミリメートル下の細胞に接触した際その症状が出たことでわかったという。今、心は、脳の中にある固まりとしてあるのではなく、さまざまな部位が、それ相応の反応をすることがわかってきている。

二十年前に想像された脳内世界が、今日の脳神経学者の発見と差異があるからと言って、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は、陳腐だと言うことはできない。心はいまだ「人類最後の未知の大地」(『世

界の……』という指摘は、『魂』は、どうやら、脳の中の一十億の神経細胞の関係性から生じる。しかし、なぜそんなことが可能なのか、近代科学の最高最良の成果を持ち寄っても、さっぱり見当がつかない。『脳と妄想』との茂木の見解と重なるように、今なお、脳は、未知の領域である。

4 人の意識をたどる物語

村上春樹が、ここまで心のありようにせまったのは、なぜであろうか。

『世界の終り』では、心をなくしたと思っていた図書館に勤める彼女に、心の断片が残っていることを知った時、『僕』は、彼女の心にとどろきたいと思う。それが、『僕』が、『ハードボイルド・ワンダーランド』では『私』が、すでに失ったと思っていた、人に対して関心を持つという感情である。心がなくては、人の愛を信じることもできない。意識とは何か、意識はどのようにして人間に愛する気持ちや、逆に喪失感を感じさせるのか。意識に対する関心は、人間への関心と深くつながっているのである。小説を書く時、必ず人間が描かれる。それは人間の心を描くのである。意識の在り方について考えることなく、小説を書くことはできないというのが、村上春樹なのではないだろうか。

意識の核に存在した『世界の終り』という物語は、『僕』の喪失感が創作したもので、喪失感を感じていても、その感情が新たに物語を構築することを『僕』は認識してはいなかった。「無数の記憶や認識の断片が選りわけられ、選りわけられた断片が複雑に組みあわされて線を作り、その線がまた……」(『世界の……』)という中で物語が作られていったのだ。

頭の中は、〈ワンダーランド〉である。そこにこそ、人間が存在してい

る。自らの脳の中をのぞき見ること、自らの情動や感動さらに意識を、自ら感じて見ることが、〈ワンダーランド〉に楽しむことであろう。

村上春樹は、自分の意識をなぞり続けているのではないだろうか。知覚と意識との関係、茂木の言うような妄想は、先に挙げただけではなく、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』以後の作品に、長編、短編の区別なく現れている。

茂木の『脳と妄想』には、例として『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』でも使われている一角獣も、マジシャンであるハリー・フリーディニもあげられている。茂木が意識的に例示したと言うつもりはないが、人の心の処理役を負わされた一角獣は、太古への幻想をかきたて、哀切を感じる。レプリカに満足そうな博士の笑いは、残酷に響く。クオリアということを考え始めると、小説を読むにも、近代主義的な方法意識で切っていくだけでは、その作品のそのものが把握しきれないであろうし、第一おもしろみが消えてしまう。茂木は、『たけくらべ』を読みその切なさに涙するとき、私たちの心の中には、美登利の魂がきつと立ち現れる。」

(『脳と妄想』p.213)と述べ、「自分の心の中にあらわれる他者の魂たちをどれくらい切実な存在として自分の中に立ち上げるかということは、ひとえにその人の意識的、無意識的選択にかかっている。」と続けている。自分の心が何をとらえ、感じ、それをどのように意識したのかを問題としなければ、小説から感じられることを、語り切ることはできないだろう。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』には、先に指摘したように、自分の理論を実験したいという欲望だけの博士と、仕事として決められたことをするだけという門番が描かれる。どちらも『私』と『僕』という主人公を、縛っている存在である。主人公は、人とのコミュニケーション

シヨンのよくない、モチベーションも低い、従って実生活において情報量の極端に少ない、近代の社会生活には不適応な人物である。博士と門番は、自己中心的で、他者への同情を持ち合わせないが、悩みもなく生き延びていく。「世界の終り」と名付け壁で囲った街は、近代社会に不適応な主人公が自ら作り上げた逃避場所でありながら、門番に縛られ、社会との境界となる壁に見張られている。彼女の心を感じたために街に残った「僕」は、喪失したはずの生を取り戻そうとしているが、老人の自己中心的実験によって、生きることができない。この物語は、近代科学主義の犠牲になった主人公の物語なのである。

〈ワンダーランド〉としての意識世界は、生命保存を第一目的としていたのではなかったのだろうか。人間が生きられるために、外界の対象との調整に熱心な機能として脳があるのではないのか。主人公が結局生きられなくなったのは、自ら、意識の死をイメージしたからに他ならない。すなわち主人公は、これまでの人生の中で喪失感を抱き、生きる意欲をなくし、自らを救うために、夢想したのだ。仮想こそが、自らを生かしも殺しもするのだという思考に、村上春樹もたどりついていたと言えるのではないだろうか。

脳という〈ワンダーランド〉を明らかにするには、まだまだ、多くの人が意識についてイメージすることが必要であろう。茂木が語るように、人は仮想と共に現実に対しているのだとすれば、仮想を物語の題材とし、自ら心について考えたこの作品は、エイターテイメントの幻想小説としていくことはできない。

(おおた れいこ 日本語日本文学科)